

堪へざるものがある。日蓮上人が傳教大師を三國四師の一人に教へられ、又この信念に感奮せられたのも、蓋し當然の事である。更にまた大師が弘仁九年五月、嵯峨天皇に奏上し奉つた山家學生式には、僧侶の資格を國寶、國師國用の三種に分類して、次の如く説明してゐられる。

國寶とは何物ぞ。寶とは道心なり、道心ある人を名づけて國寶と爲す。故に古人の曰く、徑寸十枚、是れ國寶に非ず。一隅を照らす、此れ則ち國寶なりと。古哲又曰く、能く言ひて行ふこと能はざるは國師なり。能く行つて言ふこと能はざるは國用なり。能く行ひ能く言ふは國寶なり。三品の内、唯言ふこと能はず、行ふこと能はざるは國賊と爲す。

と、即ち大師の理想とした國寶的人材とは、私がさきに言へる上求菩提下他衆生の大道に生きる菩薩的な人物である。祖山學院が専門學校に昇格するに至つたことには延山當局の苦勞も並大抵でなかつたらうと察する。この聖勞を深謝すると共に、私はこの専門學校より、幾多の國寶的聖僧の出現を望んでやまない、宗祖示して宜はく本より學文し候ひし事は佛教をきはめ佛になり、恩ある人をもたすけんと思ふ。佛になる道は、必ず身命をすつるほどの事ありてこそ、佛にはなり候らめ（佐渡御

勘氣鈔）

行學の二道をはげみ候べし。行學たへなば佛法あるべからず。我もいたし、人をも教化し候へ。行學は信心よりをこるべく候（諸法實相鈔）

追憶

唐津 法蓮寺 藤山 英憐

祖山學院が昇格しましたことは爲宗爲山何共慶賀の至りに存じます。私は明治三十三年から同三十七年迄學院で學ばして貰つた老衲でありますが、私の入學の時は本間僧正を大先生として富木堯廣上人が起信論や華嚴の五教章、貫名本壽上人が俱舍論、後藤照善上人が唯識論、脇本觀靜上人が眞言の十卷章、小山圓泰上人が祖書と申す様な擔當で、日日の講書が仲々盛でありました。又毎週土曜日は質問會に充てられ、能所互に忌憚なく甲論乙駁眞剣な法戦が交され、それが酣になつてから最後に本間僧正の裁決を仰いで幕を閉ずると云ふ有様でした。先の宗門の教學部長の湯川僧正など、當時二十五才位の青年僧で學院では年若き方でしたが、一度論陣を張ると仲々義を枉げず、上級生も先生方も其銳鋒の突撃に容易に

勝負がつかず、最後本間大先生の牙營に迄切込むと云ふ武勇振りを發揮して居られし事共記憶に残つてゐます。

然るに何事も榮枯盛衰は免れず、そんなに盛んであつた學院が間もなく維持困難の悲運に際會し、本間僧正は去つて自坊に還られ、諸先生方もそれぞれ退山の止むなきに立至りまして、生徒としても新しき入學者は來らず支院より通學の聽講者は別として、悲む可し私と島智良君と兩人になつて仕舞ひました。茲に時の法主豊永貌下をして學院閉鎖の命が發せられんとして學院の運命が明滅の間に彷徨ふ有様となりました。此際私共は兼ねて此事を憂ひ、學院繼續の歎願を内々申出て居つたのであります。然しそれが愈々最悪の日が訪れまして、本山は遂に學院閉鎖の舉に出でたのであります。私と島君とはそれが何としても残念で、たまりません。實は無謀とは存じ乍ら、堪え難き憤懣の情に任せ恐れ多くも法主貌下に諫言書の様な物を捧呈して、學院創立の當初、日早上人の名に成る往昔樓神閣聖祖の御寶前に讀み上げられたと云ふ大學院開校式の慶祝文など、當時の教友雜誌より探り出して文章に織り込み、苟も維持困難などの名の許に先師方の之丈の熱情を込めての宗學研鑽の必要を強調して創立せられし此學院を今御廢止になるなど正に墮獄

の惡業と存じます、若し御本山で學問尊重の御意志だにあらば、假令私共兩人が全國に飛檄してでも維持の方法は何とか講ぜられませうなど、隨分ヒドイ激語を列ねて大奥に御無禮千萬な御暇を告げ、會所の廣間に歸り本間僧正御使用の大見台を其中央に持出し、今から思ふと誠に狂人じみた暴舉でしたが、其時は悲憤の餘りに眞劍だつたのです。島君と兩人で七條をかけて大學院の葬式を營み、行李を纏めて泣く／＼戀しき御山を退去したのであります。斯くて兩人は舟で富士川を下り、内房の本成寺に立寄り、執事冷泉要淳上人に御別れを告ぐるに上の事情を具申したのです。其時恰も當時身延小檀林の林長を勤め居られ私共も聊か教鞭を採つて加勢申上げて助教と云ふ間柄にあつた富木堯廣上人が來合せて居られ、座に在つて此事を耳にされ、兩聖大變に心配を下され、君等は兩人共法主貌下よりは特別の愛念が注がれ居り、比叡山に留學を命ずるとか北海道方面の開教に重要な任を授けるとか多大の期待をお掛けになつて居るのに、一端にしてそんな御別れをさせては自分等として捨て置けぬ兎角此儘放任する譯に行かぬから一應御山に歸れと云はれ、遂に兩聖に引戻されて再び御山の御厄介になることになりましたが、畢竟間もなく學院再興の許可が本山よ

り發令、教師先生と云ふ段取りになり、本間僧正は既に大崎大學の人となられて御歸山、無之爲め、其代りに關本僧正と云ふので奈良に御遊學中の處を執事米山義隆上人が請待に出馬される、私は大垣に走つて釋覺圓上人を助教授に願つて來る。一方學生募集の廣告が出たため學生も大勢參集、再び大見台が用を勤むることとなつて學院の春が迎へられ。甲府の方から青柳眞孝君、秋山智照君、池上檀林の方から齋藤純正君等、九州より立野良瑞君、松田惠徳君、東義信君、水山泰山君等（今は故人となられし方が多い様です）それに現在御山の本行勲下

里僧正、麓坊の丸山上人方も來院就學、後に川手海禪師吉田圓是師、鎌田麗嶽師方も登院勉學された様です。かくて私は日露戰爭に應召出征しましたが、在延の富木上人より戰地への慰問狀中に祖山大學院の「大」の字が看板より削られたとの悲報に落涙した様な事も有りましたが、三十九年凱旋後直に御禮參りに登山の砌は小山圓泰上人の先生時代で、上人は私を見られると、お前は學院に縁深き者だとて一夕凱旋の歡迎會など開いて貰ひ、丁度學院より出征されて之も凱旋されし鎌田麗嶽師（當時歩兵少尉）と共に歡待を受けし事共ありまして随分古き昔語りであります。越えて明治四十一年御山より三門建

立の御布教が九州に行はれ、豊永良上に隨伴して故武田宣明僧正又今尙健在の中村是本僧正とが御隨行に加へられし事共も共に學院出身と云ふ御縁故に基きしものと存じます。其上愚息英雅など大崎に入學させし者が後に學院に轉校御山で卒業させて貰ひし事共、能く／＼深き因縁の存することかと存じます。爾來學院は益々隆盛に向ひ、愈々今日の發展を見るに至りましたこと、何共慶祝の情に堪へない次第であります。

昇格を祝ふ

武田海正

一粒の麥の發芽も天地萬物の合力による。一軒の家も萬人の普請合力によつて建つのである。

明治維新は決して維新の時に成つたのではない。この回天の聖業を成功せしめたものは長い間の國民に對する思想的訓練であつた。逆賊北條幕府に向つて立正安國の大義を説いた日蓮聖人の思想は楠木正成公に生きて法華經を淨寫せめ、水戸光圀公に流れて大日本史を篇纂せしめた。その行動、その著述の中にあらはれた尊皇愛國の燒夷彈は國民の魂と魂をゆすぶり、燃し盡さないではお